

報告：コンスタンツのレーゲンボーゲンシュレーを訪問し、そして参観した。

船尾日出志

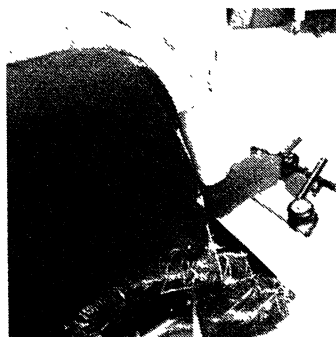
Ein Bericht : Ich besuchte die Regenbogen Schule Konstanz und hospitierte.

Hideshi FUNAO

### 1. 9月16日午前：パソコンを用いた重度障害者の学習支援



2015年9月16日早朝、フライブルク教育大学のゲストハウスを発ち、ドイツ鉄道を乗り継いでコンスタンツ・ヴォルマティンゲン駅に到着したのは10時30頃であった。レーゲンボーゲンシュレー（以下、「虹学校」と表記）の校長、ヴォルフガング・ブリュックナー（Wolfgang Brückner）先生が、事前の約束通り駅のホームで待っていてくださった。駅から徒歩で約3



分、閑静な住宅街にある虹学校に到着した。1年半ぶりの訪問であった。2階の校長室でコーヒーをいただき、最初に参観させていただいたのは、モニカ・ドビンス（Monika Dobbins）先生による授業

であった。ドビンス先生と重度の知的障害と身体障害の生徒であるマレーネさんの1対1の授業であった。車椅子に取り付けられたコンピューターとモニターに、驚いた（この装置を作製

したのは副校長、ノルベルト・ラーム（Norbert Rahm）先生とのこと）。マレーネさんがカニューレという器具を用いて、鼻や口を通さずに、気道から直接呼吸していることにも驚いた。かの女は、ドビンス先生の指示を受けて、自由に動かせる両足を用いて、コンピューターを操作し（赤いボタンを足で踏むと先に進み、右足の下に隠れている緑のボタンを押すと、モニターに写真が出てくる）、学習を進めていた。



その後、校長室で給食をいただいたあと、校内を散策した。日本の学校のような運動場（広いグラウンド）は存在しない。緑におおわれ、いくつかの遊具がおかれた中庭で遊んでいる子どもたちと会話することができた。ブランコで遊ぶ2人の生徒に、自己紹介すると、左の生徒は「こんにちは」「さようなら」ときれいな発音で言ってくれた。このエピソードを校長先生に伝えると、校長先生も驚いておられた。帰国後、同僚のオリバー・マイヤー先生はこのエピソードについて「日本のアニメ文化の影響かな」と分析。

## 2. 9月16日午後：リンゴ狩り



午後、5年生の子どもたちのリンゴ狩りに付き添った。リンゴ園は虹学校から自動車で20分ほどの距離のところにあった。2台の小型バスに

分乗した。わたしが乗せていただいた紺色のバスを運転していたのはドビンス先生であった。車中、「一緒に行く子どもたちの1人の母親はタイ人です」という事実を教えていただいたり、「フナオはドイツの大学で講義を担当したことがありますか？」というような質問を受けたりした。また「日本語でエッフェル【ドイツ語でリンゴのこと】のことは何というのか？」と尋ねられたとき、「りんご」と答えたのだが、分かってもらえなかった。そこでとっさに「ビートルズ、リンゴ・スター、リンゴ」と言うと、分かってもらえた。ちなみに引率したのは、ドゥビンス先生のほかに、アネ・ドゥベルケ (Anne Dubberke) 先生



とイネス・シェップラー (Ines Schöppler) 先生であった。絶好の天気のもと、皆で一緒にリンゴ園を散策しているとき、愛教大附属特別支援学校で遠足に付きそったときのことを思い出していた。



日本のリンゴよりも2回りほど小さいと思った。しかし味は日本のリンゴに負けないほど美味しかった。その後、リンゴ園に併設された小売店で買

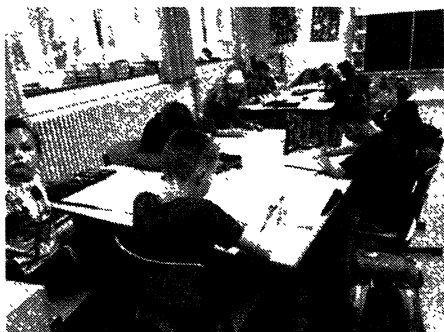


い物をし、小売店横に設置された小さな遊び場にて子どもたちは遊んだ。その小売店では、新しい知識を得る機会があった。かぼちゃが入った箱の横に立てられた札に「北海道」と書いてあった。わたしは原産地のことを表示しているのだと思った(北海道から輸入!)ののだが、後日、かぼちゃのことをドイツでは、キュルビスではなく、「ホッカイドウ」と言われているという事実を知った。確かに札を

よく見ると、小さな文字で「地元産」と書いてある。帰国後、調べると「ホッカイドウ・キュルビス」というかぼちゃの種類があるとのこと。

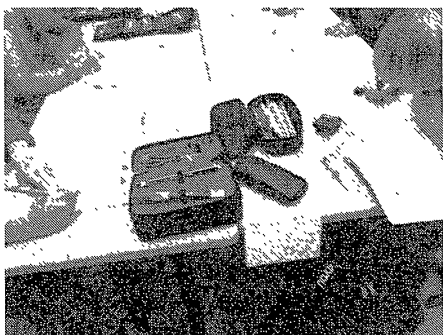
### 3. 9月17日午前：インクルージョン学級の参観

コンスタンツから鉄道で30分ほどの距離にあるジンゲンのホテルを7時頃に出発し、8時過ぎにはコンスタンツ・ヴォルマティンゲン駅に到着した。やはりブリュックナー先生の出迎えを受けたが、この日はそのまま先生の車に乗せていただき、コンスタンツのゲブハルト・シュレーにむかった。インクルージョンクラスを参観するためにである（訪問したのは第3学年、もちろん基礎学校レベルである）。インクルージョンの思想およびその意義、インクルージョン教育のドイツにおける展開、そして何よりもこの日の参観結果については、教育創造機構の紀要に「研究ノート」として報告した。ここでは、その報告では

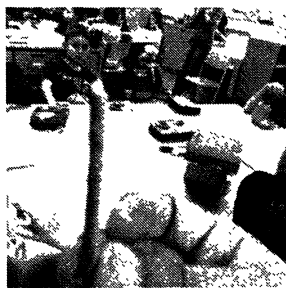


記述できなかった若干の興味深い事項について紹介する。

2人の先生(+1人の介護者)および20名の児童(うち3名が軽い知的障害、ただし3名のうち1名は欠席)わたしが自己紹介し、写真撮影への許可を求めたとき、1人の児童(左の写真のわたしの方を見ている男児)から「何を言っているのかさっぱり分からない」と言われた。先生はたしなめたが、わたしはもう一度、発音に注意して自己紹介をやり直した(写真撮影と日本での写真紹介は、もちろん許可された)。正直、ショックだった。が、分からないときに、分からないと言ってくれたことは良かったのだと思う。本格的に授業が始まってから、子どもたちの学習の様子をみていると、インクルージョン教育の意味が実感できた。同じテーブルに座っている子どもたちが、一人ひとり異なる課題に取り組んでいたからである。



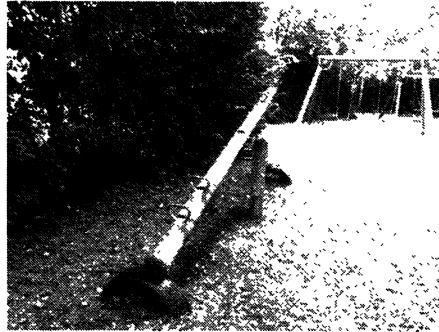
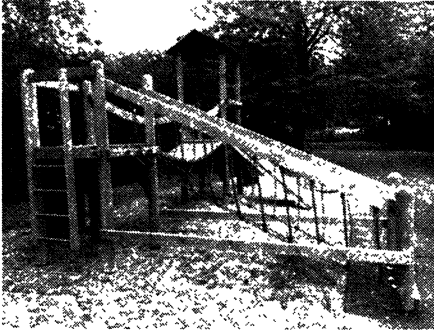
9時半に1時限目の授業が終了し、「朝食」の時間になった。子どもたちは家から持ってきた飲み物と食べ物を食べ始めた。一斉の「いただきます」も「ごちそうさま」もなかった(「グーテン・アペティート」という声も聞かなかった)。静かに食事が始まり、静かに終わった。食べ物の内容をよくみると、子どもによってずいぶん差異があった。あまり栄養への配慮を感じな



い内容もあった。というのはランチボックス一杯に入ったプリッツを持ってきている子どももいたからである。実は、その子は、わたしの自己紹介に「何を言っているのか分からない」と言った児童であった。ところが、その子はわたしにプリッツを1本くれたのであった。もちろん、わたしは

「ダンケ・シェーン」と言って、食べた。

#### 4. 9月17日午後：30年戦争



正午過ぎに、校長先生の車で虹学校に戻ってきた。しかし9月17日は水曜日なので、授業は昼まで、子どもたちはすでに下校していた。校長



先生の仕事がひと段落するまで、校庭を散歩し、遊具等を見学し、写真撮影をした。木製のアスレチックとシーソーが印象的であった。

午後1時過ぎに校長先生と一緒に近所のレストラン（ボーデンゼー湖畔）で昼食をとり、その後、緑の豊かな住宅街にある校長先生のご自宅へ向かう（この日から2泊させていただいたが、寝泊りしたのはすでに独り立ちなさっている息子さんの部屋であった。なんとバス・トイレ付きであった）。夕刻、校長先生ご夫妻と散歩、その際、ご夫妻が結婚式を挙げられた小さな教会（ロレットカペレ）を見学。コンスタンツのアルマンズドルフという場所に存在する小さな教会であったが、とはいえコンスタンツでは重要かつ有名な教会であった。実は、その建設は30年戦争（1618－1648）に由来しているのである。

教会内で校長先生に買っていただいた（3ユーロ）パンフレットには、ロレットカペレが建設された経緯や理由が詳しく叙述されているが、ここではその冒頭の言葉のみを紹介しておこう。

「ロレットカペレはまだ30年戦争の最中に、コンスタンツ市がスエーデン軍の包囲を打ち破って勝利したことへの感謝の気持ちから建設された。その教会が誕生したのは、市民の参画（「愛する聖母」信心会）のおかげである。その維持は数世紀にわたって常に市民の

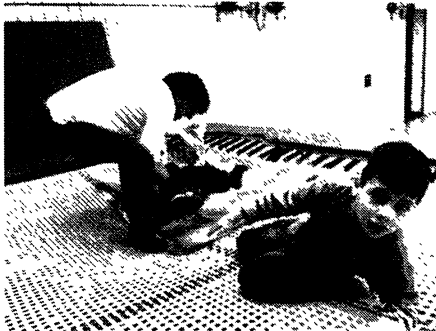
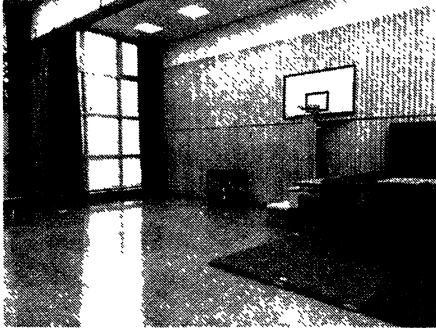


関心事である。特別な位置、調和のとれた全体像のかけがえのない性格、ならびに宗教的風俗・慣習は、その生き生きした文化財をその比類なさと美しさのなかで守ることを義務付け、そして委託している」。

パンフレットのなかに掲載されている左の絵は、初めてカペレをカラーで描いたものである。1653年にヴォルフガング・シュペングラーという人が、4cm×4cmの大きさのガラス板に描いた。この優雅な、しかしとても小さな絵は、コンスタンツのパラ園博物館のツンフトホールにおける偉大な都市コンスタンツ議会の代議員たちの名前や家紋を描いたステンドグラスの一部である。すでに戸外の祭壇を有するカペレ

を見ることができる。

## 5. 9月18日午前：トランポリン



3日目、校長先生の御自宅を7時40分頃に出発、8時には虹学校に到着した。中庭や近所を散策した後、1限目には地下にある体育館に行った。しばらくすると、ヴェルナー先生(A. Werner)と男子児童2人(ケビンとアントン)が(ケビンは車椅子で)やってきた。



そして3人はトランポリンに乗った。ヴェルナー先生は車椅子に乗っていたより重い障害のケビンを抱きかかえ、スイングし始めた。逞しいヴェルナー先生にとっても、決して楽な活動ではなく、呼吸を整えながらスイングなさっていたのが印象的であった。



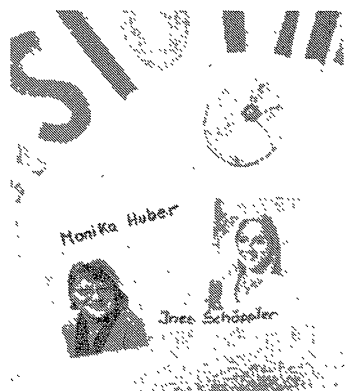
15分ほどスイングが続いた。最初、嫌がるような叫び声を出していたケビンも、徐々に落ち着き、まるでスイングを楽しむような雰囲気になった。ふと気がつくと、



1人の女生徒、メアビが介護員と一緒にトランポリンに加わっていた。メアビは横になって、スイングすることには関心がないようにみえた。その後、ケビンは迎えに来た職員と一緒に車椅子に乗って体育館から出ていった。見送った後、ヴェルナー先生はもう1人のより年長の、そしてより障害の軽いアントンとスイングし始めた。アントンは最初から嫌がることなく、トランポリンを楽しんでいるように思えた。その間、メアビは介護員とボール遊びをしていたのだが、スイングを終えたアントンもボール遊びに加わった。アントンに比べると、メアビは運動への関心は少ないようであった。

その後の休憩時間に、コーヒーを飲みながらヴェルナー先生と30分ほど話をすることができた。ケビンはスペイン国籍、アントンはドイツ国籍だが両親はロシアからの移住者、そしてメアビはトルコ国籍であると聞いた。虹学校の外国籍児童生徒の割合は15%（ドイツでは平均的）とのこと。

## 6. 9月18日午前：集団遊び

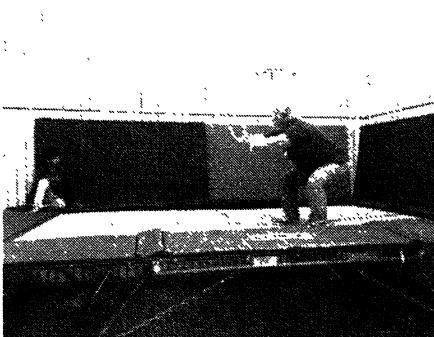


その後、ヴェルナー先生と別れて、再び体育館に戻った。第2限目は理学療法担当の先生方、ベテランのモニカ・フーバー（Monika Huber）先生と若いシェップラー先生によって指導され

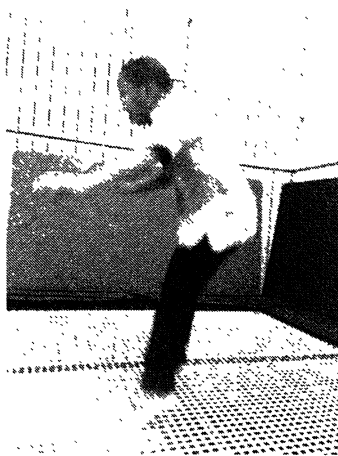
ていた。集まった子どもたちは同一の学級に属しているのではないとのこと。最初は教員が指示した場所（たとえば「エッケ（隅）！」）に走って集まるという遊び、その後はフラフープを使って、「椅子取りゲーム」的な遊びが行われた。



子どもたちは楽しそうに、元気に遊びまわっていた。その後、1個のフラフープを体育館の真ん中において、「鬼」以外の全員が輪になってフラフープを掴み、「鬼」がフラフープをしっかりとつかんでいる人の両足を引っ張るという遊びが行われた。フーバー先生の「握って！」という言葉に合わせて、子どもたちは懸命にフラフープをつかんでいた。その後、フーバー先生と3人の男児だけが残って、



トランポリンの活動が始まった。失礼ながら、その体格から想像できないほど、お手本を示すフーバー先生が身軽なのに驚いた。身軽といえ、左の写真のように、一番小柄な男児がとても上手にトランポリンでスイングしていた。この東南アジア系の男児は、実はわたしに懐いてくれて、翌朝、誘われてサッカーゲームを一緒に楽しんだ。



そのように、虹学校では運動が重視されている。同校が発行しているパンフレットには次のように書かれている。

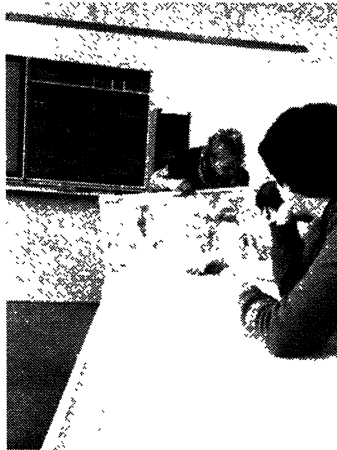
「運動促進の原理はすべての学級で実施される。さまざまな教科において授業と運動は緊密に絡み合わせられている。少なくとも1日に1回は習得された教材の定着のために体を動かす課題が提示される。特別支援学校教員、知的障害児のための専門教員、身体障害児のための専門教員および介護員は学級チームのなかで緊密に協力する」。



## 7. 9月18日午後：職業学校段階学級

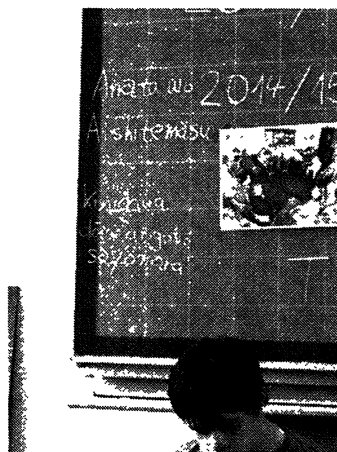
昼食後、虹学校のほとんどの児童・生徒はバスでプール学習に向かった。わたしは唯一学校に残っていた職業学校段階のクラスを参観した。虹学校の最上級学年のクラスで、最年長は19歳のカロリンという名の女生徒であるとのこと。

午前中はずっと地下で参観したのだが、午後は校長先生に連れられて、3階の教室に行った。校長先生は担任のドネンマイヤー (Beate Donnenmayer) 先生に、「フナオを参観させ



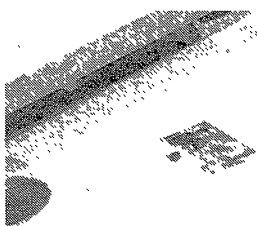
てほしい。日本で知的障害者のための学校長を経験しており、子どもを支援することができる」と耳打ちなされた。わたしはカロリンの横の座席を指定され、かの女の支援を委ねられた。

最初、わたしが日本から来たということで、日本を世界地図で確認した。そして日本から飛行機でドイツまで何時間かかるのか、日本のどこにわたしが住んでいるのか、というような質問に答えた。日本から飛行機で12時間ほどかかるという話に、生徒たちは驚いていた。また愛知、名古屋は誰も（先生も含めて）知らなかったのだが、さすがに豊田市の名は、先生はもちろん、生徒のなかにも知る者がいた（この点はおそらく多くのドイツ人に共通する傾向であろう）。



次に短時間の日本語講座、日本語での挨拶やお礼の言い方を生徒たちに伝授した。すぐにドネンマイヤー先生が板書してくださった。その後、1人の女生徒が“*Ich liebe dich*”を日本語でどう言うか尋ねたので、わたし自身が黒板に「アイシテイマス」とローマ字でまず書き、そして「アナタヲ」を書き足した。日本語では主語を省略することが多いと説明した。この点は特に日本語特有ということでもなく、理解できる生徒も存在するように思えた。

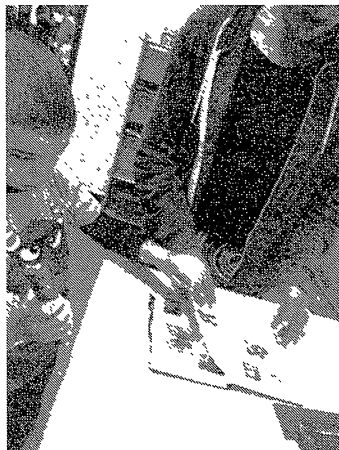
その後、既定の学習が始まった。ほとんどの生徒は来週木曜



日の「朝食」の注文票記入、そして週計画表（時間割）の記入を行った。しかしカロリンは独自課題であった。すなわち穴の中にステッ

クを差し込む活動である。（あとでドネンマイヤー先生から聞いたが、将来の就業に、すなわち歯科医療関係の道具製作の一端を担う作業に役立つとのこと）わたしはカロリンが1本差し込むたびに、褒め、ハイタッチを繰り返し、最後まで支援した。校長時代の経験が生きた。授業の締めくくりは日記の記述。カロリンの日記帳には、すでにかの女を支援するわたしの写真が貼付されていた。

#### 8. 9月19日午前：自閉症専門家による個別指導

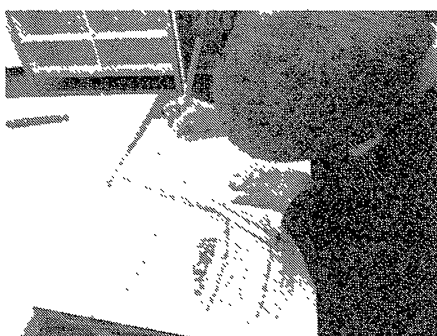
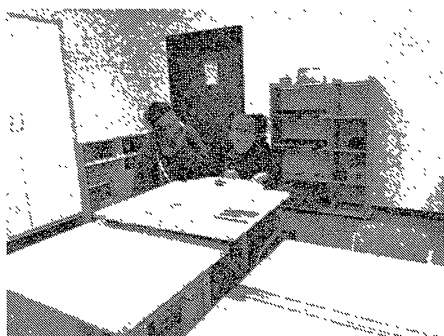


4日目参観したのは、週に1度来校される自閉症の専門家による指導。この日は、新年度の初回の授業。まずまったく話せない男子（2年生）が登場。かれは夏休みにボーデンゼーのマイナウ島に行ったときの写真付き日記を読んだ。読むといっても、この子が持つのはある種のテープレコーダーで、母親の声で日記に書か

れた文章が読まれる。文章も母親が書いているとのこと。ただしこの子は内容をしっかりと分かっているようで、母親の朗読に従って写真を指さしたり、ページを繰ったりしていた。知的には相当の水準であると思えた。



次に車椅子に乗って登場した同じく2年生の男児は知的には障害はない。かれはわたしに、「車椅子が時速61キロで走る」と教えてくれたのだが、わたしは「そんなに速く走ると危険だし、61キロっておかしい。聞き間違いだ」と思ってしまった。ところが、本当に61キロで走るのだそうである。ドイツ語と算数の教科書が用意されて



いた。

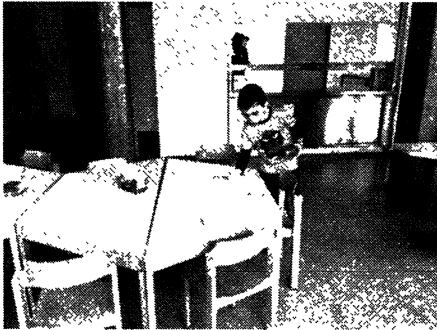
かれは文章を読むのが多少おぼつかないものの、文字はしっかり書け、計算もできていた。このような専門家による行き届いた

学習指導は貴重であると思った。

虹学校のパンフレットによれば、同校では自閉症の児童・生徒の支援および教育にかかわって TEACCH (Treatment and Education of autistic and related communication handicapped children) という方法が使用されている。その関連で次のような説明がなされている。「TEACCH という方法は学校における授業原理である。TEACCH は自閉症と診断された青少年およびあまり明瞭に話せない児童・生徒を、その子たちの日常の組織と構造化において、そしてコミュニケーションの可能性の発展において支援する。教師も保護者も自閉症の専門相談員によって学校内で支えられ、そして見守られる」。



## 9. 9月19日：朝食



授業の参観後、2年生のクラスで「朝食」を一緒に食べることになった。さきほどの授業で参観した2人の男児が黙々と準備をしていた。そ

れぞれ自分の仕事が決まっているようで、スムーズに準備をしていた。

虹学校のパンフレットには「自立した生活」について次のように書かれている。「日常生活における可能な最大の自立は至高の学習目標であり、そしてすべての教育領域を包括している。知的障害者のための学校において、『自分でできること』（身体の清潔、着衣、食事および買い物）を増やすことには大きな価値がおかれている」。



用意が出来た頃、学級の子どもたちおよび先生方が席に着いた。わたしの席も用意されていた。校内で焼かれたパンを皆で食べるのである。飲み物は

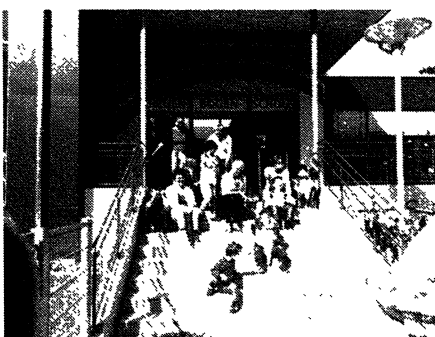
各自が持参しているが、わたしにはコーヒーが用意されていた。最初に皆で手をつないで「グーテン・アペティート」という言葉がひときわ印象的な歌をうたった。

## 10. 9月19日：入学式



思いがけずドイツで入学式に参加できたことは幸運であった。何よりもシュール・テューテの実物を見たかったからである。入学式の開始は午前10時、場所はアウラ（講堂）であった。式の始まる前、新入生の保護者にシュール・テューテの写真を撮りたいとお願いしたところ、子どもに持たせてくださった。シュール・テューテの

なかには、文具のほかに、お菓子がたくさんつまっているとのこと。というか親の愛情がこめられているのであろう。日本の学校でもそうなのだが、保護者の方々の様子を拝見して、お子さんにかかる愛情の深さに感動した。



虹学校の入学式は司会者も存在せず、「一同起立、礼」というような号令もなく、まったく儀式的ではなかった。MCは校長先生が1人で

務めていた。副校長先生はギターを持って、歌の伴奏をしていた。そもそも出席者の服装は皆、普段着だった。さすがに新入生の保護者の方々は普段着よりはフォーマルな服装のようではあったが。新入生の紹介の後、パラバルーンで皆が遊んだ。

30分ほどの式の後、玄関で写真撮影が行われた。それもきちっと整列するような感じのものではなかった。

その後、新入生は教室で担任の先生方と交流し、保護者は別室で校長先生と副校長先生から説明を聞いた。保護者からの質問は主に、通学に関するものであった。

そして在校生との対面会が、再び講堂で行われた。実はその際、わたしは校長先生から挨拶をするように求められた。日本語とドイツ語での挨拶を求められたのである。

わたしはまず日本語で挨拶した。「こんにちは」に「こんにちは」と返してくれた人がいたが、もちろんわたしの日本語の話は、まったく理解されていないようであった。そして次のようにドイツ語で話した。

"Guten Tag! Ich bin Japaner. Ich kann natürlich nicht Deutsche. Also, Könnten Sie bitte mit Ihrem Herz verstehen, was ich sage und spreche? OK? Heute kann ich die Einschulungsfest in Deutschland sehen. Das ist die erste Erfahrung für mich und also sehr eindrucksvoll für mich. Herzlichen wünsche ich die Weiterentwicklung Ihrer Kinder hier in der Regenbogen Schule Konstanz. Und ich muss und möchte vor allem folgendes sagen : Alles Gute! Danke Schön!"

拙い発音で、文法的にも間違っていると思うが、式後、一人の保護者（父親）が「感動した」と褒めてくださった。



（左の写真は校長室のドアに貼付されている時間割である。

そこに書いてあることは、ただ一言「幸せであること」である。）